

日本体育大学紀要 22 巻 1 号 (1992) 1-13

## 唐戸山神事相撲の盛衰

下谷内 勝利\*

(平成 4 年 6 月 1 日受付, 平成 4 年 7 月 1 日受理)

### A Historical Study of the Rise and Fall of Karatoiyama Shinto Ritual Sumo

Katsutoshi SIMOYACHI

The purpose of this study clarifies the process of Karatoiyama Shinto Ritual Sumo which had been handed down since ancient times in Hakui-city, in Ishikawa-Prefecture. Sumo has been changed from a Shinto event to a national game, and clarifies the background of the rise and fall of this Shinto Ritual Sumo.

A local newspaper Hokkoku Newspaper was used for the main source of this study.

After the study, the clarified objects were as followed:

- 1) The history of Shinto Ritual Sumo started when the sponsor (the person who was in charge of the event) was moved from Hon'nenji temple to Hakui shrine.
- 2) After the beginning of the Meiji era, Karatoiyama Shinto Ritual Sumo was influenced by the color of Great Edo Sumo. Then, Karatoiyama Shinto Ritual Sumo had been going to the competition sports.
- 3) Because of the lack of amusement, Karatoiyama Shinto Ritual Sumo had been prosperous from the 1955's to 1965's.
- 4) Since the Tokyo Olympic Game in 1964, Karatoiyama Shinto Ritual Sumo became on the decline because of offering new (the wide variety of) entertainment on TV.

#### 1. はじめに

明治期に移入された近代スポーツは、日本に古来からある相撲にも影響を及ぼした。競技を中心とした相撲は、この時期に近代的組織が確立・形成され、今日にいたっている。なかでも、現在の日本相撲協会の前身である相撲会所が明治 22 (1889) 年に東京角力協会と改称されたことにその好例を見出すことができよう。

一方、祭礼として特定の日に行われる神事相撲は奉納相撲として行われ、今日においても、一般的に神事として神の意思をうかがい豊作を祈願する農耕儀礼として行われているものが多い。石川県羽咋市の羽咋神社で 9 月 25 日に開催されている唐戸山神事相撲も、相撲の勝敗によって豊凶を占う農耕儀礼の相撲であったとされてきた<sup>1)</sup>。けれども、この唐戸山神事相撲は、少なくとも近世から明治 11 年までの間、羽咋神社の東方に隣接する真宗大谷派本念寺がこれを司ってきたものが、翌 12 年から羽咋神社の祭事として行われるようになったもののな

である。主管の交代した時期は本邦の政府による近代国家が形成される時期と一致することから、唐戸山「神事」相撲としての歴史は日本の近代史とともにあったといっても過言ではなからう。ゆえに、神社主管の「神事」相撲が形成され、隆盛していく過程を追究することは、すなわち唐戸山相撲の近・現代史を明らかにすることにつながるといえよう。

そこで、本稿では明治 12 年から唐戸山「神事」相撲が形成され、隆盛していき、第二次世界大戦以降の高度経済成長期を契機に衰退していく過程に着目し、その「神事」のもつ「近代性」と、その限界を明確にしようとするものである。

#### 2. 神事相撲の形成と発展

##### 1) 神事相撲の形成

唐戸山の相撲は明治に入り、政府の打ち出した神仏分離政策のあおりを受け、明治 12 (1879) 年に本念寺の主

\* 大学院体育学

管する「仏事」相撲から羽咋神社が主管する「神事」相撲への移行を余儀なくされた。この政策の目的は短期間に祭政一致による国家統一を図ることであった。これによって神道が仏教の上位に格上げされ、羽咋神社が独立し、羽咋神社を管理していた本念寺の「唐戸山相撲」も羽咋神社の主管する唐戸山「神事」相撲として独立していったのである。羽咋神社の神事となった相撲は、江戸相撲との交流を繰り返すことによって、その文化が模倣され、神事相撲として形成されていくのである。

江戸相撲との交流は能登地方の出身で江戸相撲の力士となった人物によってなされた。江戸相撲の力士となった人物には、文政11(1828)年2月に吉田司家から横綱を免許された阿武松緑之助や初代立浪を名乗った鬼ヶ崎綱之助(別名、鬼ヶ崎勝五郎)、雷電為右衛門の再来と謳われた兜山和助(別名、阿武松和助)の名前があげられる。

阿武松緑之助は寛政3(1791)年に能登国鳳至郡七海村(現在の能都町字七見)で生まれ、文化12(1818)年3月場所に初土俵を踏んだ。文政11(1828)年2月には吉田司家から横綱を免許され、天保6(1835)年10月場所で引退した。引退後に年寄阿武松を名乗り、天保15(1844)年8月～9月にかけて越中高岡、能都七見などで相撲興行を行い、相撲道の発展と普及に努めた。

次に、鬼ヶ崎は羽咋市免田村(現、押水町)出身で万延2(1861)年に初土俵を踏んでいる。明治4(1871)年に入幕し前頭2枚目まで進み、同9(1876)年に引退して初代立浪を名乗った。この鬼ヶ崎は兜山和助と共に明治5年9月に押水町の諏訪山相撲場で地方巡業を興行している。

また、兜山和助は天保13(1842)年羽咋郡本江村(現在の羽咋市)に生まれ、明治3(1870)年に入幕を果たし、兜山和助と称した。同5(1872)年小結に進んでから同9(1876)年まで7場所にわたり43連勝を遂げ、この間、雷電震右衛門と改名している。同10(1877)年、西大関に昇進し、阿武松和助と称している。この兜山和助も明治10(1877)年の秋に故郷本江村で相撲興行を行っている。

このように江戸相撲の力士が御当所で興行を開くことによって地域の住民と交流が深まり、江戸相撲の文化が能登の地に根づいていったと考えられる。なぜなら、「大関」、「年寄」、「親方」といった名称がその影響を教えているからである。唐戸山神事相撲に「大関」という称号が最初に登場したのは明治12(1879)年からのことである。そのことは神社に奉納されている額から知ることができる。大関の第一号である富山県氷見市浜町の荒磯

嘉四郎が明治12年に奉納した額が最も古いものであるからである。この額を神社に奉納する理由は、明治の初期、羽咋神社社司、今井辰麿氏らが時の氏子総代や本念寺門徒総代および地方草相撲の親方等と謀り、若衆の士気鼓舞と商売繁昌のために勝力士の綴名額を奉納させたことにあるという<sup>2)</sup>。額の奉納が明治12(1879)年から始まり、羽咋神社が相撲の勧進元を引き継いだ年も明治12(1879)年と一致することから考えても神事相撲に変わってから大関という称号が用いられるようになったといえることができる。

唐戸山神事相撲には「大関」のほかに「年寄」と言う名称も用いられている。この年寄と言う名称は、江戸相撲が江戸中期以降に勧進相撲の事務や渉外的な仕事、また、力士の養成をつとめる人を年寄と呼ぶようになったのが始まりとされている。この年寄を梶ヶ嶽文蔵(明治15年大関獲得)が明治15(1882)年9月25日に獲得し、次いで大正5(1916)年には大浜次郎(明治元年生まれ)が唐戸山大関を得て年寄となっている。このような年寄と言う名称が唐戸山神事相撲に用いられていた事実は見逃すことはできない。

つぎに唐戸山神事相撲には「親方」という名称が用いられている点が注目される。唐戸山神事相撲では大関を獲得した者は、草相撲界の親方になることができる。年寄や親方になると後進の指導や育成、相撲の普及などの仕事を与えられるが、力士は大関を獲得し、親方になろうと大変なまでに力を注ぐのである。それはひとつには唐戸山神事相撲の大関にもなると自分自身の榮譽であるだけでなく、地元の榮譽でもあったからである。もうひとつには次にあげられるように経済的理由があった<sup>3)</sup>。

唐戸山大相撲の大関を得んとして力士間に非常な意気込みを見るのは別に理由を存する、<sup>4)</sup>は唐戸山の相撲に大関を得ると同時に力士は親方の株に入り、郷人は亦右の力士の爲めに祝相撲を催して諸方からの祝儀を一纏めにして力士に與へるの例である、此の祝儀の額郷人の熱心如何にもよるけれども四五百圓乃至は七八百圓の多額に上るを以て之を得た力士は相當の業務を見立てて一廉の生活を送くる事が出来る、されば大関を得ると否とは勢ひ死活問題に属するから一生一代の相撲として勝負を決するのである。

以上のように大関になると、親方の株が手に入るだけでなく、地元に戻っての祝相撲で大金を手に入れること

ができたのである。このように唐戸山神事相撲には江戸相撲を模倣したと思われる事柄が見られるのである。

さらに、唐戸山神事相撲の競技方法について見ておくことにしたい<sup>4)</sup>：

上山下山の事 相撲當日参集する力士の面々は北陸七州を通じて五六百員の上に出で、之を奥弓、中弓、前弓の三種に區別す更に加賀、越中諸州よりせるものは上山に属し、能登、佐渡諸州よりせるものは下山を占め、敵手を定めずして二角して勝負を決し勝敗等しければ三角して決し、新に上るもの必ず其勝者と角し、累々轉進終に數百番を數ふるので悉く待たなしである、上山下山は羽咋川の東西を區別して其の方面に従ひ諸州の力士の所属を定めるので自然に東西を爲すの次第である、二十年前下山に属する羽咋の力士が勝敗の物言ひから同盟して三年場所を踏まず一騒動を惹起せしめたなど此相撲に於ける意地の張り合ひは頗る想像外のものがある。

名誉の大關 二角皆敗るるもの、一士にかち得るもの、連りに數士に勝つもの當日の場所は雜然として一ならざる觀を呈するのであるが、最後に二角して勝つものは大關の月桂冠を戴く、僅し勝敗相等しければ先勝を一番勝と稱へて之を大關とし後勝を二番勝と稱へる、されど數十年前にあつては八人抜きを大關とした

この引用から、総勢 500～600 人位の力士が上山（加賀、越中諸州の力士）と下山（能登、佐渡諸州の力士）に分れて対戦することがわかる。また、上山下山は羽咋川を中心に東西に區別され、その方面に属する力士で分けられていることから自然に東西が成立していると言われている。さらに力士の実力によって「奥弓」、「中弓」、「前弓」に區別されて対戦することもわかる。ここで注目されるのが競技の方法である。下山、上山の力士が相手を決めずに対戦し、二番勝負で勝敗を決する。二番続けて勝つことによって始めて次の相手と対戦することができるのである。一勝一敗の場合、もう一番相撲を取るによって勝敗が決定される。これを數百番繰返し、最後に二番続けて勝利した者が大關と決定するのである。また、數十年前までは八人抜きをしたその勝者が大關の位を獲得したとされたのである。さらに、習わしについても記述されている。唐戸山神事相撲では前弓、中弓、奥弓という名称を用いているが、この奥弓、中弓、前弓について、小結のことを前弓、関脇を中弓、大関を奥弓としていることが分かる。このように唐戸山神事相

撲は小結、関脇、大関格にあたる相撲をそれぞれ前弓、中弓、奥弓とに分けて神事相撲にふさわしい呼び方に変えたことが考えられる。

次に、神事相撲の組織と神社祭式についても見ておきたい<sup>5)</sup>：

相撲の式典 兎に角二千年來の歴史を有する相撲であるから其の式も普通一般のものとは大に異つて居る先づ羽咋神社にては此の神事相撲の爲めに常に相撲取締二員を置く、これは氏子の中より選任し任期は三年、又毎歳相撲の前日特に唐戸山取締一員を氏子の中から選任する、又上山下山の二方は各親方三員を選び親方は行司を北陸七州に求め相撲に老いたるもの二員を擢きて神主の抽籤を乞ふので其の一員に取られたものは以て終天の光榮と爲す、翌二十五日行司は古制服を着け親方と相供に神社に詣れば神主は團扇を授けて行司をして神前に公正不偏を誓はしめる、行司は僅し此の誓やぶらば神明立るに謹を加へらるるも悔みずと言ふ。

大關人名帳 愈々大關の名誉を荷ふたものが手車で拜殿に運び込まると神主を首め氏子、總代、相撲取締等は席次を正し威儀を繕ふ、次で行司は勝敗の状を報じ取締之を詮衡し神主之を神に奏白し、勝者を大關人名帳に登して奏告の式を修め、相撲原由書を朗讀し、土杯を舉げて大關に屬し後、賞状、相撲原由書各一通、白絹一本、堤灯一張を行司に附して大關に授ける、行司は大音に「謂け深き羽咋の神事相撲大關に叶ふ何某」と讀上げるの例である。

このことから明治期には唐戸山神事相撲は相撲を行うために相撲取締、唐戸山取締、行司といった神事相撲の執行組織を形成していたことがわかる。また、羽咋神社においての祭式も明治期に形成されていたことも理解できる。このように唐戸山神事相撲は江戸相撲を模倣することによって年寄、親方、大関という称号や相撲の執行組織を取り入れ、相撲の形をつくりあげていったのである。そして、明治末期において神事相撲の基礎となる祭式が形成され、興行されるようになったといえよう。

## 2) 神事相撲の発展

神事相撲としての基礎が形成された唐戸山の相撲は、羽咋神社の官幣中社昇格願書が提出される昭和3(1928)年9月に向けて、徐々に「神事」相撲としての格式を整えていった。そして、大正9年に商工会が関与することによって唐戸山神事相撲はさらに発展し、その

「祭式」を確立していったのである。

そこでまず、羽咋神社が官幣中社昇格願書を提出するに至るまでの過程を見ていくことにしたい。羽咋神社は、明治4(1871)年における社格制度によって明治5(1872)年9月、郷社に昇格した。同8(1875)年の府県社以下における神社祭式の執行により、これまで本念寺の仏事の相撲(引上報恩講<sup>6)</sup>の満座相撲<sup>7)</sup>であった唐戸山の相撲を羽咋神社の神事相撲として明治12(1879)年から執り行うようになった。そして、明治39(1906)年には府県社以下の神社への神饌幣帛料供進が定められるに至り、羽咋神社も同年12月に神饌幣帛料供進神社に指定された。さらに、大正6年には官幣中社昇格のために羽咋神社の祭神(皇族)である石衝別命と石城別命の御墓を御治定したのである。

明治から昭和20(1945)年までの間、神社は国家に管理されていた。明治政府による社格制度は明治元(1868)年3月13日の布告をもって始まり、当初勅祭社、神祇官直支配社、准勅祭社の三等に区別された。しかし、この区別は永続的な制度としての性格を持たなかったため、明治4(1871)年5月に至り官社以下定額、同7月にこれに附帯する郷社定則を公布し、全国的規模で社格制度の確立がなされるようになったのである。これは神社を官国幣社(官社)と諸社(民社)に分け、さらに官社を官幣社と国幣社に分け、政府の管理下に置き、それぞれを官幣大社、国幣大社、官幣中社、国幣中社、官幣小社、国幣小社の三等に区分し、官幣社は神祇官が、国幣社は地方官が祭るとしている。また、諸社については、藩社であったものを府社、府藩県崇敬の神社を県社、郷邑の産土神で一戸籍区に一社を設けたものを郷社とに分けて、それらを地方官(政府)の管轄下に置き、その附属下に村落の氏神を置いて二村社とする制度であった<sup>8)</sup>。この制度によって全国各地で昇格が頻繁におこなわれるようになったのである。このことから羽咋神社が明治5年9月に社格を郷社に改めていることは、明治4年の定則に従って行われたということができる。また、明治14(1881)年11月に県社に昇格していることについては、明治8(1875)年8月に政府によって神社祭式が公布され、府県社以下の神社に祭典を執行するように通達されたことに要因があるとみなさなければならない。この通達によって、羽咋神社は本念寺が主管していた唐戸山の相撲を4年後の明治12(1879)年に神社の祭典として取り込み、執行していったのである。神社の祭典に唐戸山の相撲を取り入れることによって神社祭式を確立した羽咋神社は、2年後の明治14(1881)年11月、県社に昇格したといえよう。さらに唐戸山の相撲

が神事相撲としておこなわれるようになった翌年の神社明細帳にはこれまで本念寺の仏事の相撲であった唐戸山の相撲のことを、羽咋神社の神事相撲としてつくり上げているのである。これについては『羽咋市史』(中世・社寺編)が詳しいので見ておきたい<sup>9)</sup>。

由 緒 明治一三年の神社明細帳には、古老の伝承として本社の創祀の由来を記するところがある。

----- 中 略 -----

命はこの地で薨ぜられたので、住民は御墓を築いて奉葬、その御墓の土をとった地の跡を唐戸山と称し、今も巨大なすり鉢状の凹地をなし、毎歳ここで神事相撲が行われている。

----- 中 略 -----

また命の御子石城別命は羽咋国造に定められ(成務天皇あるいは雄略天皇の御代といわれる)、やがてこの地でなくなられた。よって御墓を築いて奉葬し、祭祀を怠らず後々に及んだと伝承するのである。この両墓は、大正六年九月二七日に石撞別命・石城別命の御墓と御治定になった。

この引用から、唐戸山で毎年神事相撲が行われていたことを知ることができる。近世においては本念寺の仏事であった相撲をあたかも神事相撲であったように記述されているのである。このように唐戸山の相撲は神事相撲として格式あるものに変化を強いられていったのである。

明治39(1906)年12月の神饌幣帛料供進神社指定については、明治政府が同39(1906)年に府県社以下神社への神饌幣帛料の供進についての制定をおこなった年であることから考えても納得できることである。

そして、神社明細帳にみられる大正6(1917)年9月27日に石衝別命・石城別命の御墓と御治定していることや、これにともなって拝殿を前方にずらしていることについても官幣中社の昇格準備に関連しているのである。なぜなら、官幣社は歴代天皇及び皇族を奉祀せる神社(檀原神宮、吉野神宮、明治神宮、鎌倉宮等)、歴代皇室の崇敬顯著なる神社(加茂兩社、春日神社、石清水八幡宮、氷川神社等)でなければならないからである<sup>10)</sup>。つまり、石衝別命・石城別命の御墓と御治定することは、皇族である石衝別命・石城別命を祭神にして羽咋神社を由緒あるものにするための方法であったといえよう。

一方、相撲に関しては、大正9(1920)年からこれまでの前弓、中弓、奥弓に加えて余興相撲が行われるよう

になった。稽古相撲や前弓賞（青少年力士）、中弓賞（経験二、三年の力士）、奥弓賞（古参力士）、三人抜き、五人抜き、などの余興相撲が加えられたのである。また、大正 11（1922）年には羽咋町商工会（現羽咋市商工会）から優勝・江戸山大相撲と記された化粧廻しが贈られている。現在、余興相撲の運営を羽咋市商工会が行っていることから推しても大正 9（1920）年の余興相撲の開始時から羽咋市商工会の関与があったものと考えられる。ゆえに、大正 11（1922）年に市商工会からの化粧廻しが贈られたと考えられるのである。

さらに、江戸山神事相撲は商工会が関与することによって、徐々に余興を増やしていき、神事相撲として発展していくのである。昭和 2 年には相撲甚句、昭和 5 年に土俵入り・甚句踊りが余興に加わり、昭和 10 年においては打上花火・仕掛花火が打ち上げられている。これらの余興の効果によって、昭和 14 年には相撲見物のために臨時列車が運行されるまでに至っている。このことについて昭和 14（1939）年 9 月 26 日付の『北国新聞』は次のように掲載している<sup>11)</sup>：

地方民から待ったなしに待たれた羽咋名物江戸山相撲は二十五日開催されたがこの日氣遣はれた天候も朝来降らず照らずの相撲日和となり真宗大谷派本念寺の大法要と相俟つて近郷、近在からまた省線能登鐵道の定期臨時各列車および乗合バス或はトラック、發動機船等によって續々と運ばれる人、人人で全町押すな押すな雑踏を極め

…………… 中 略 ……………

正午ころから間断なく打上げる花火とともに數萬の人々は江戸山へ江戸山へと歩を進め午後二時ころから稽古取りが始まり同四時ころから愈本相撲の幕は切って落とされた（午後四時記）

この記事から、江戸山相撲と本念寺の大法要に近郷、近在からまた能登鐵道の定期臨時列車および乗合バス、トラック、船にまで乗って人々が集まってくる様子が分かる。この人気は商工会の催す余興によってもたらされたといっても過言ではなからう。

また、昭和 21 年から昭和 27 年の間、毎年東京相撲を招待し、さらに神事相撲の人気を高めていったのである。江戸山神事相撲は大正 9（1920）年に商工会が関与してから昭和 30 年に至るまでほとんど観客数、力士数に変化が見られない（表 1 参照）。戦後 10 年間の方が観客数、力士数が多いくらいである。このことから神事相撲は商工会に支えられて発展していったといえよう。

また昭和 32 年頃には、神事相撲は現在行われている神事相撲の内容とほとんど変わらない内容で行われるようになっていく。昭和 32 年 9 月 26 日付の『北国新聞』紙上において神事相撲の祭式を見ておこう<sup>12)</sup>：

石川県羽咋町の江戸山相撲は二十五日午後四時から行われ、六時すぎから雨もやんで観衆も約三千名に達した。加越能力士百余名が、五人抜、小中大決勝、田谷石川県知事杯争奪トーナメント、十人弓と熱戦をつゞけ昨年の大関国乃山（字ノ氣即）は大決勝、田谷知事争奪トーナメント、十人弓の三つの栄冠を占め、つぎつぎに打上げる花火とともに相撲は最高潮となった。午後九時から土俵場で物故力士と行司三十二氏の追悼会を行い、引続き中入りがあった九時半から中弓、奥弓の神事相撲に入った。奥弓の候補力士はとくに多く奥弓に入ってから約三十番の相撲を重ねた。

この記事から、五人抜、小決勝、中決勝、大決勝、トーナメント戦、十人弓の余興相撲につづき中入り後の前弓、中弓、奥弓の神事相撲が行われていることが分かる。この内容と今日行われている神事相撲の「祭式」（表 2 参照）を比較してみたい。今日行われている相撲は、稽古取り、小決勝、中決勝、十人弓、特別対抗戦、五者対抗戦、トーナメント戦、大決勝の順に行われる。さらに土俵入りのあとに神事相撲となり、前弓、中弓、奥弓の順に行われる。以上が今日行われている神事相撲の「祭式」である。今日行われている余興相撲と昭和 32 年 9 月 25 日付の新聞記事の余興相撲の内容に大きな違いが見られないことがわかる。

このように江戸山神事相撲は昭和 3 年 9 月 15 日の官幣中社昇格願提出にともなう神社の整備と大正 9 年の商工会の関与によって徐々に発展し、昭和 32 年にはその「祭式」を確立していたのである。

### 3. 江戸山「神事」相撲の衰退

江戸山の相撲は昭和 32 年頃に「祭式」に沿って興行しはじめたが、この頃から、本相撲は衰退の一途をたどることになった。そこで神事相撲が衰退していく事実を参加者数と観客数から概観し、その要因を、ひとつには高度経済成長による娯楽観の変容、もうひとつにはスポーツのテレビ中継に求め、江戸山神事相撲が衰退していった点について明らかにしたい。

羽咋神社が神社としての体裁を整え、商工会の関与によって「祭式」を整えた江戸山「神事」相撲が確立する

表 1-1 北国新聞にみる参加者数・観客数の推移

年 代	参加者数	観 客 数	年 代	参加者数	観 客 数
明 4 0		3 万人	昭 6		数万人
4 1	数十名		7		4 万人
4 2		例年の3分の1	8		数万人
4 3		午後2時にほとんど満員	9		数万の人々
4 4			1 0	1 7 5 名	6 万人
大 1		1 万 5 千人	1 1		5 万人
2		5 万人	1 2		2 万余
3			1 3		
4		2 万人以上	1 4		数万の人々
5			1 5		5 万人
6			1 6	1 5 0 名	3 万余
7		幾万の人出	1 7	1 5 0 余	
8		例年以上	1 8		5 万余
9			1 9		数万の観衆
1 0			2 0		3 万余
1 1	数十名		2 1		
1 2			2 2		5 万余
1 3		数万の群集	2 3	3 百名	6 万余
1 4	百数十名		2 4		約1 0 万人
昭 1	数百名		2 5	2 5 0 名	3 万余
2			2 6	百名以上	5 万人
3			2 7	2 0 0 名	
4	百数十名	数万人	2 8		
5	1 7 0 名		2 9	2 5 0 名	約2 万人

のは昭和 32 年頃であった。しかし、この時期は日本が高度経済成長期をむかえつつある時期であったが、唐戸山神事相撲の方は他の草相撲同様、衰退の傾向が顕著にあらわれた時期でもあった。なぜなら、唐戸山神事相撲の参加者数は昭和期に入ってから 140 人を割ること

がなかったが、昭和 32 年の参加者数は 100 余名に減少し、初めて 140 人を下回る参加者数となったからである（表 1 参照）。この年から唐戸山神事相撲は今日の神事相撲の「祭式」にかなり近い形式で行われるようになったが、逆に参加者数の方は昭和期に入ってから最低の数を

表 1-2

年 代	参加者数	観 客 数	年 代	参加者数	観 客 数
昭30	約200名	約3万	昭54	約100人	約4千人
31	約200名	3万	55	約100人	
32	百余名	約3千人	56	約100人	
33	99名		57	約100人	
34			58	約100人	約3千人余
35	約150人	5万人	59	約100人	約2千人
36	約120名	約5千人	60	約100人	約2千人
37	約100人	3万人	61	約100人	
38	約100人	約3千人	62	約100人	約2千人
39	約100人	約2万人	63	約100人	約千5百人
40	約100人	約2万人	平成元	約100人	
41	約100人	約5千人			
42	約100人	約1万人			
43					
44	約70人	約1万5千人			
45					
46					
47	約90人	約3千人			
48	約100人	約3千人			
49	約100人	約4千人			
50	約100人	約4千人			
51	約100人	約3千人			
52					
53	約80人	約4千人			

記録している。しかも翌33年の参加者数は99名に減少し、100名を割るにいたっている。しかし、昭和35年には参加者数は再び増加傾向を示したかに見えたが、翌36年には約120人に再び減少しているのである。そして、昭和37年には参加者数が約100人となり、以降この人数でもって横ばい状態がつづいている。そして昭和

44年には参加者数が約70人と過去最低の人数となった。昭和47年には約90人となり、昭和48年から平成元年にかけては、昭和53年の約80人を除けば約100人の参加者数で保たれているのである。

一方、昭和32年以降の唐戸山神事相撲における観客数についても見ておきたい。昭和31年までの観客数で

表 2 江戸山神事相撲日程表

日	程 (毎年9月25日)
午後1:00	神 社 奉 額 祭
2:00	神 社 相 撲 祭 立 行 司 任 命 祭
3:30	稽 古 ど り
4:30	協 賛 相 撲 小 決 勝 中 決 勝 十 人 弓 特 別 対 抗 戦 五 者 対 抗 戦 ト ー ナ メ ン ト 戦 大 決 勝
8:10	中 入 り 神 事 太 鼓 土 俵 入 り 相 撲 甚 句
8:30	神 事 相 撲 前 弓 中 弓 奥 弓
10:00	神 社 幣 帛 授 与 祭

過去最高の人数は約10万人、最低の人数は1万5千人であった。しかし、昭和32年にはその数約3千人と過去最低の観客数となった(表1参照)。そして、昭和35年の観客数は5万人と隆盛を極めた頃の観客数に戻っているが、翌年には5千人の観客数であった。続く昭和37年には観客数を3万人に戻したが、同38年に3千人、同39年に約2万人、同40年に約2万人、同41年

に5千人、同42年に約1万人、同44年には1万5千人と増減を繰り返していることがわかる。このことは、少なくとも能登の人々の相撲に対する関心に変化があらわれたことを示しているといえよう。そして昭和47年から同49年の観客数はそれぞれ順に約3千人、約3千人、約4千人にとどまり、翌50年の観客数が約4千人、同51年3千人、同53年に約4千人となっている昭和32年から減少傾向にあった観客数は、昭和47年以降には2千人～4千人の人数で落ち着くことになったのである。

このように江戸山神事相撲は参加者数および観客数に著しい変化が見られるようになってきたのである。これは高度経済成長によって日本人の娯楽意識が大きく変化したためであった。なぜなら、高度経済成長は日本人の生活水準を向上させ、生活様式に変化をもたらしただけではなく娯楽に対する意識まで変化させたからである。このことが江戸山神事相撲を衰退させた要因といえることができる。

そこでまず、その要因を高度経済成長による娯楽の変容に求め、これが江戸山神事相撲を衰退させる要因となったことを明らかにしたい。明治11年以前の江戸山の相撲は、真宗大谷派本念寺が主管する仏事相撲であった。そして、この相撲は真宗行事の中で最も重要とされる引上報恩講の満座相撲として行われていたのである。真宗において寺院への参詣は宗教的行為との大義名分を背景にしながら、実際には娯楽的要素も兼ね備えていた。つまり、江戸山の相撲には娯楽としての機能があったのである。このことについて『蓮如と真宗行事』は次のように述べている<sup>13)</sup>：

もともと大きな宗教行事は、意識しようとしまいと、予祝・収獲感謝の色彩が強く、精進潔斎の宗教行事と稲霊を鼓舞するための娯楽が併せ行われる。

この引用を見ると、大きな宗教行事は娯楽的要素を伴っていることがわかる。このことから参詣は人々にとって憩いのひとときを意味していたと言うことができよう。このような寺社詣のもつ娯楽性は、江戸山の相撲が仏事相撲から神事相撲に移行しても受け継がれてきた。けれども、高度経済成長のあおりを受けて変化していったのである。

高度経済成長は昭和30～32年の世界的好景気に助けられ、「神武景気」が到来したのを契機に始まったとされている。この高度成長によって鉄鋼、電力、石油化学、電気、自動車、産業機械等の諸部門を中心に、技術革新



と設備投資が急速に進み、産業構造は戦前の軽工業中心から重化学工業中心に移行していったのである。昭和30～48年の間の経済成長率は年平均10%を記録し、この間に鉱工業生産は10倍、輸出額は14倍、労働賃金は6倍に達し、国際収支は大幅な黒字となった。そして自由主義諸国の中でアメリカに次いで国民総生産(GNP)第2位の高度工業国家に成長するに至ったのである。このような急速な経済成長によって国民の生活水準が向上されていくことになる。カラーテレビ、電気冷蔵庫、ルームクーラー、乗用車など耐久消費財の一般家庭への普及、加工食品の消費量増加、教養娯楽費、レジャー消費の増大といった消費に異変をもたらした。そしてこの余波は農村部にまで及んだ。農村部では多くの労働力を都市に吸収されたため、農村部の人口が激減していったのである。このことについて『石川県の百年』は次のように教えている<sup>14)</sup>：

ニクソン＝ショック(昭和四十六年)・石油危機(昭和四十八年)までの高度成長期における石川県の産業別就業人口の推移をみると、昭和三十年(一九五五)の全就業人口を100(462,799人)とすると、高度成長期のいちおうの頂点と考える昭和四十五年(一九七〇)の伸び率は118(545,127人)である。これは同期の県全体の人口増(100→104)より大きく、高度成長によって大都市に労働力が吸収されただけではなく、地域内においても就業機会が増加した面もあわせて示している。それは第一次産業、とりわけ農業人口のいちじるしい減少にもかかわらず、第二次産業(70%)と第三次産業(65%)の激増によるものである。この傾向は高度成長期には全国的に共通しており、ちなみに昭和四十五年における各産業の全国平均就業率は、第一次産業22.1%、第二次産業33.5%、第三次産業44.3%と、石川県とはほぼ同数値である。

この引用を見ると、高度成長による大都市への労働力の吸収や農業人口の著しい減少は第1次産業から第2次、第3次産業への人口の移動を意味していることがわかる。このことは、労働時間の短縮につながり、余暇を増大していくことにもなったのである。これによって娯楽の選択肢が増え、娯楽を共有しあうことから、個人の快楽として求めるようになったといえよう。

また、農作業における機械化は、従来の農作業の効率化をはかるだけでなく、農業従事者の肉体労働の機会を著しく減少させていった。ために、力業をなせる者が厚

遇されることはなく、したがって相撲に秀でることが農業従事者の必須の要件ではなくなったのである。唐戸山神事相撲の衰退はそのような農業社会の変化と無関係ではなかったといわねばならない。

一方、政府による生産者米価の値上げが毎年行われることによって、農民の生活は豊かになっていった。すなわち日本人の生活に対する意識が変化していったのである。生活の便利さを得るために農民たちは現金収入の道を求めた結果、老人たちは孫の世話に駆り出されることになった。一家の主人の座を次の世代に譲り、隠居生活に入って寺院に詣るなど悠々自適の生活を送ることができなくなったのである。人生後半の休み日(＝遊び日)は、高度経済成長をとげた社会によって奪われることになったのである。このようにして本念寺の報恩講に詣でる人々の数が減少するようになっていく。かくして本念寺の報恩講の時には本念寺周辺と羽咋神社の境内に露店(市)が立ち並ぶが、その際の人出が高度経済成長の前後では大きく異なっていくのである。このことについては昭和31年9月26日付の『北国新聞』と昭和54年9月26日付の同紙記事から垣間見ることができる。そこでまず最初に、昭和31年の記事を引いておきたい<sup>15)</sup>：

この日の羽咋地区は駅前通り、銀座通りから唐戸山にいたる道路と羽咋神社境内、本念寺境内には約三百の露店が軒をつらねて大市がひらかれ、押しかけた近在の客で身動きならぬ大にぎわい。この数は約5万人とみられた。

この記事から、本念寺および羽咋神社の周辺には約300の露店が立ち並び、当日の人出は約5万人であったことがわかる。この人出は昭和53年になると次のように減少する<sup>16)</sup>：

また同市内の本念寺では恒例の法要が行われて、駅前通り商店街には二百軒余の露店が並び、同市はこの日二万人近い人出で終日にぎわった。

この記事から約2万人の人出があったことがわかる。すなわち、この両者の記事から昭和31年に約5万人であった人出が昭和54年に至っては約2万人と半分以下の数に減っているのである。以上のことから、高度経済成長は国民の生活水準を向上させ、テレビなどの耐久消費財の一般家庭への普及など娯楽の選択肢を増やすことになった。また、労働時間の短縮にともなう余暇の増大が生じた。その結果、それまで地域中心の生活から都市

型の生活へと代わり、娯楽の共有（＝余暇の共有）から娯楽の独占（＝余暇の独占）へと、これまでの娯楽に対する考え方に変化が生じたのである。このことが娯楽として機能してきた唐戸山神事相撲を衰退させた要因であるといえよう。

次に衰退の要因をテレビのスポーツ中継に焦点をあて、それらが唐戸山神事相撲を衰退させる要因となったことを明らかにしていきたい。

高度経済成長期に先駆けて大相撲のテレビ中継は昭和28年に開始された。大相撲はこの年から四場所制で開催されることになったが、その最初のテレビ放映はNHKによって夏場所から開始された。さらに秋場所からは日本テレビも加わってNHKと民間放送が競争する形で中継が行われた。この頃の大相撲のテレビ中継の反響ぶりについて『昭和の大相撲』では次のように記述されている<sup>17)</sup>：

NHK テレビの実験放送が始まったのは二月一日、もちろん現在のようにカラーではなく白黒であったが、大きな関心を集めた。受信契約者数はわずか八百六十六人だった。

NHK が五月の夏場所から本放送をはじめ、大相撲も茶の間で楽しめるようになった。日本テレビも一場所遅れて秋から中継、街頭テレビは黒山の人だかりとなり、大相撲人気はいっそう高まった。

この引用を見ると受信契約者数はわずか866人と少ないが、街頭テレビの存在が多くの人々に相撲観戦の機会を与えていたことがわかる。このテレビ中継開始を契機に大相撲の人気は益々上昇していったのである。

そして昭和33年にはそれまでの年四場所制から六場所制となり、当時の横綱「若乃花」、「栃錦」らの人気も手伝って大相撲は全盛期を迎えることとなった。このことは、翌34年にNHKを含むNTV、TBS、フジテレビ、NETといった在京テレビ局がそろって大相撲のテレビ中継を行ったことから察することができよう。また、テレビの受信契約数をみても、昭和35年の500万軒突破を契機に昭和37年には1千万台、普及率64.8%という数字を記録し、テレビによるスポーツ中継が盛んになっていくのである。

一方、このような大相撲の隆盛期に唐戸山神事相撲には参加者数・観客数の点で変化が見られる。参加者数は昭和35年に約150人、同36年に約120人、同37年に約100人と減少しており（表1参照）、また観客数は約5万人、約5千人、約3万人と激動している。このこと

は「栃若」時代から「柏鵬」時代の大相撲がテレビのブラウン管を通じた棧敷から見られるようになったため、相撲の関心が草相撲から大相撲へと移り変わっていったことに起因しているといえよう。また、大相撲9月場所の興行が神事相撲の開催日以前、あるいは、その日と並行して行われていたことも神事相撲への関心を薄れさせた要因といわねばならない。その後、唐戸山神事相撲の参加者数は毎年100人前後と落ち込むが、観客数は昭和44年まで変動を続け、昭和47年以降に約2千人～4千人の数で落ち着く。これは隆盛を極めた頃の10分の1の数である。

ところでこの唐戸山神事相撲と並行し、羽咋郡富来町で行われていた相撲は昭和40年代にすべて消滅している。このことについては『富来町史 通史編』が次のように伝えている<sup>18)</sup>：

富来町の相撲は唐戸山相撲に関連して、藩政時代から盛んであった。明治時代に入ると特に盛んとなり、領家住吉神社の出世相撲（九月二日、大関に御大旨と化粧まわしが贈られた）、恵光寺の引上会相撲（十月九日）、草木淨因寺の引上会相撲（十月十九日）、本光寺の引上会相撲（十一月二日）、建部神社の天長節相撲（十一月三日）などがあり、さらに大正時代には郷社祭相撲（七月十五日）、大福寺（八月五日）、草木（八月十七日）、市掛相撲（九月五日）、鶴野屋（九月九日）、福浦（九月十二日）、酒見（九月十三日）、鉦打藤津比古神社（九月十六日）など引上会の最終日や各部落の祭礼には必ずといって相撲大会が催された。

…………… 中 略 ……………

しかし年々力士が少なくなりその上経費がかさばり、四十年代に入ると、これだけ盛んであった町内の相撲も一つ二つと消え、今では一つも残っていない。

この引用から、近世あるいは、明治・大正期に始まった数多くの村の相撲が昭和40年代に入って、力士不足、経費不足のために消滅していったことがわかる。このことは高度経済成長に伴い、素人相撲に参加する人びとの娯楽観が、相撲を「取る側」から「見る側」へと移り変わっていったことを示していると言えよう。このように、テレビ棧敷の登場によって、ブラウン管を通して大相撲を見ることができるようになったことは、素人相撲に参加する人びとのみならず、それを観戦する人びとの娯楽観をも大きく変容させたのである。

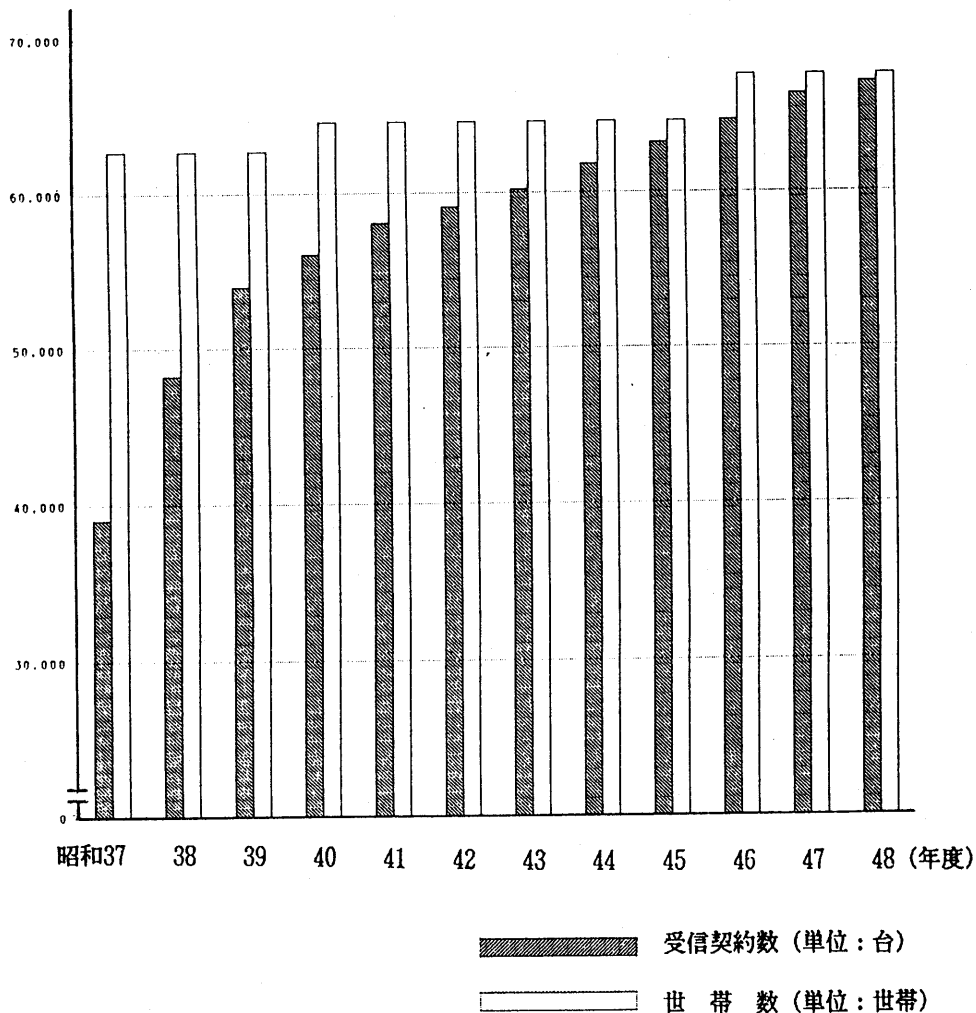


図 1. 能登地方（河北郡，羽咋郡，羽咋市，鹿島郡，七尾市，鳳至郡）における受信契約数および世帯数の推移

さらに、昭和 37 年にはテレビ受信契約台数 1,000 万台突破によってその普及率が 64.8% となった。単純に計算すれば、2 軒に 1 台の割合でテレビが普及したことになる。テレビのブラウン管を通して新しいスポーツが人々の目に焼きついていくことになるのである。そのきっかけとなったのが昭和 39 年 10 月に開催された東京オリンピックであった。当時、スポーツ娯楽の少なかった日本にとって、結果として多くのスポーツを紹介することになった東京オリンピックのテレビ中継は、新しいスポーツの普及を推し進めることになったと考えられる。周知のように、東京オリンピックは「テレビオリンピック」とも称されたようにその模様を伝える電波が国内はもとより、世界を駆け巡ったことで知られてい

る。唐戸山神事相撲の参加地域である能登地方（河北郡，羽咋郡，羽咋市，鹿島郡，七尾市，鳳至郡）においても多くの家庭の茶の間に電波が送信された。このことはテレビを購入に向けた家庭が多かったことを示している。能登地方においてテレビがいかに多く購入されていたのかについては、テレビの受信契約数と世帯数を量的に把握することによって知ることでも可能であろう。図 1 はそのような目的に基づいて作成された。本図によれば昭和 37 年から 39 年までの間の世帯数は 62,706 世帯と横ばいの状態であるのに対し、受信契約数の方は昭和 37 年に 39,061 台であったのが、東京オリンピックの開催される同 39 年には 52,986 台へと飛躍的に伸びていることがわかる。この受信契約数の伸びは東京オリンピックの

テレビ中継を視聴するために能登の人々がテレビを購入したことを教えているのである。このような傾向は能登の人々に限らず、国内の多くの人々が東京オリンピックに合わせてテレビを購入していったことを物語っている。東京オリンピックがテレビの報じたオリンピックであったことを次にみておきたい<sup>19)</sup>：

NHK 直後調査によれば、オリンピック競技の実況中継をみたと答えた人は、東京で99%であった。期間中にテレビの実況中継をみなかった人は、まさに稀少価値的な存在であった。こうした状況を反映して、NHK 総合テレビの視聴状況（NHK 全国オリンピック放送視聴率調査）は、午前では（最低～最高で表示）8.0%～31.7%，午後 10.3%～56.2%，夜間 35.2%～85.0%ときわめて高い視聴率を示している。39 年 6 月の NHK 金沢テレビ視聴率調査によれば、午前（最低～最高で表示）1.3%～20.4%，午後 3.1%～13.5%，夜間 0.8%～27.6%であった。オリンピック期間中はまさに異常であった。

この引用からオリンピック中継が極めて高い視聴率を示していることがわかる。つまり、ほとんどの国民の目がオリンピックに向けられていたと考えられる。これによって、それまで国民に享受されることのなかったスポーツがテレビを通して国民のものになっていったといえよう。また東京オリンピックは日本選手を中心にテレビ中継された。このことが、次に掲げるように高視聴率を示した要因といえよう<sup>20)</sup>：

テレビオリンピックは、日本選手を中心にして展開した、といわれる。予選、準決勝、決勝のすべてにわたって、テレビは日本対外国の勝負がテレビオリンピックであるかのような印象を与えた、とある人はいふ。実際、テレビの高視聴率競技はすべて日本選手の出場するものであった。午前では 11 日のボート（フォア、ペア、シングルスカル各予選）～32%，11 日のバスケットボール（予選プエルトリコ対日本）～32%，11 日の水泳・飛込（第 1 日目）～31%，午後では、11 日の重量あげ（バンタム級のノ関）～56%，11 日のバレーボール（女子、日本対アメリカ）～51%，夜間では 23 日の体操競技（男女、個人種目別最終日）～79%，17 日の水泳・飛込（7 日目）～76%，11 日の水泳・飛込（第 1 日目）～74%，14 日の水泳・飛込（第 4 日目）～72%，14 日のレスリング（フライ、バンタム、フェ

ザー級のフリースタイル決勝）～70%。これらはいずれも、日本選手が出場した競技であった。テレビ放送は、日本選手を中心にしてなされた感が深かったし、また人びとも日本を中心にしてテレビを見た。

以上の引用を見ると、テレビ中継は日本選手を中心に行われたことがわかるが、これによって高視聴率が得られている。このようにして人々はテレビのブラウン管を通して新しいスポーツを知ったのである。結論を急ぐならば新しいスポーツを紹介することになった東京オリンピックは唐戸山神事相撲の衰退の一つの要因となったといえよう。

唐戸山神事相撲においてはこの時期に参加者数が約 100 人前後に落ち着き、観客数が浮き沈みをしている時期である。その後、観客数が減少していったのである（表 1 参照）。このことから考えてオリンピックがテレビ中継され、新しいスポーツが普及していくことによりこれまで能登地方における娯楽としての相撲が 40 年代を境に衰退していったといわねばならない。

#### 4. まとめと結語

唐戸山「神事」相撲は、江戸相撲との交流により、「競技」相撲としての「近代的」組織を明治期に形成した。さらに、大正 9 年の商工会の関与によって神事相撲の「祭式」が形成されていった。「祭式」に沿った相撲興行として行われるようになった、この唐戸山神事相撲は、能登の人びとの相撲人気を高めることになったのである。しかし、この人気は高度経済成長期を境に衰退していく。その要因は、昭和 30 年頃から始まった高度経済成長が能登の人びとの娯楽観に変化をもたらしたことにあった。これまで「娯楽」としての首座にあった寺社詣にかわって、新しい娯楽が登場したのである。それはテレビジョンによってもたらされている。さらに、昭和 34 年頃、大相撲のテレビ中継によって、大相撲は日本人の人気スポーツの首座を占めるようになった。テレビ棧敷という新語が生まれ、観る娯楽としての大相撲は多くの日本人を魅了した。しかし、これと反比例するかのよう郷土に根付いていた草相撲は衰退を余儀なくされた。素人相撲としての唐戸山神事相撲もその例にもれず、草相撲と同様の衰退をしていったのである。

一方、昭和 39 年の東京オリンピックは日本人の娯楽観・スポーツ観に大きな影響を及ぼした。相撲のような地方文化としてのスポーツだけを娯楽の対象とするものではなく、多種多様なスポーツの中から自らの好みに応

じてスポーツを観戦したり、行ったりすることができるようになったのである。ために、するスポーツとしての江戸山神事相撲は日本人の、そして能登の人びとの新しい娯楽様式の外におかれることになったのである。

以上のことから明らかなように、江戸山神事相撲は近代スポーツとしての要素を取り入れつつ「神事」相撲として発展したが、日本人の「娯楽」の変容によって衰退していったといえよう。

#### 注・引用参考文献

- 1) 和歌森太郎：『日本民俗学講座 4 芸能伝承』，朝倉出版，昭和 51 年，p. 182
- 2) 平岡克明：『江戸山相撲史』，江戸山相撲史発行所，昭和 46 年，p. 10.
- 3) 森 恒救：『加越能力士大鑑』，加越能力士大鑑発行所，大正元年，pp. 58～59.
- 4) 森 恒救：前掲書，pp. 55～57.
- 5) 森 恒救：前掲書，pp. 57～59.
- 6) 報恩講とは浄土真宗の開祖親鸞の忌日（11 月 28 日）を卜して施行される法会のこと，真宗行事の中で最も重要とされている行事である。引上報恩講とはその日取りを引き上げて報恩講を営むこと。
- 7) これは，引上報恩講の中日を満座（最終日）として行われる相撲のこと。
- 8) 小野泰博他編：『日本宗教事典』，弘文堂，昭和 60 年，p. 72.
- 9) 羽咋市史編さん委員会編：『羽咋市史中世・社寺編』，羽咋市役所，昭和 50 年，p. 176.
- 10) 宮地直一・佐伯有義編：『神道大辞典』（復刻），臨川書店，平成 2 年，pp. 387～388.
- 11) 『北国新聞』：昭和 14 年 9 月 26 日付.
- 12) 『北国新聞』：昭和 32 年 9 月 26 日付.
- 13) 西山郷史：『蓮如と真宗行事』木耳社，平成 2 年，p. 22.
- 14) 橋本哲哉・林有一編：『石川県の百年 県民百年史 17』，山川出版社，昭和 62 年，p. 294.
- 15) 『北国新聞』：昭和 31 年 9 月 26 日付.
- 16) 『北国新聞』：昭和 53 年 9 月 26 日付.
- 17) 「昭和の大相撲」刊行委員会編：『昭和の大相撲』，TBS ブリタニカ，平成元年，p. 148.
- 18) 富来町史編纂委員会・富来町史編纂委専門委員会編：『富来町史 通史編』石川県羽咋郡富来町役場，昭和 52 年，pp. 626～628.
- 19) 日本放送協会放送世論調査所編：『東京オリンピック』，日本放送協会放送世論調査所，昭和 42 年，p. 72.
- 20) 日本放送協会放送世論調査所編：前掲書，p. 76.